
恋愛対象者への熱愛度と肯定および否定的感情

—日本語版熱愛尺度を用いて—

羽成隆司 河野和明

要約

恋愛対象者への熱愛感情や、彼らにたいする肯定的感情、否定的感情にはどのような特徴があるのだろうか。本論文では、熱愛感情の程度を測定するために開発された日本語版熱愛尺度の作成概要を述べた後、熱愛度および尊敬・愛情・軽蔑・嫌悪の4感情との関係について分析した調査の結果を報告した。女性回答者、男性回答者の間に熱愛度の違いは見られなかった。しかし、恋愛対象者への熱愛感情と人格的な評価は必ずしも直結しておらず、熱愛度と人格評価の独立性が見いだされた。また、同性友人と比較した場合、相対的に女性の方が恋愛対象者にたいして厳しい評価を行っていることが示された。

1. はじめに

恋愛に関する心理尺度は、さまざまな観点から複数作成されている。その中で、恋愛の情熱的な高揚に焦点を当てた尺度に、Hatfield & Sprecher (1986) による熱愛尺度 (Passionate Love Scale ; 以下、PLS) がある。ここでの熱愛とは、「一人の他者と結びつきたいという強い欲求状態であり、返報的な愛には充足感と恍惚を伴い、報われない愛には空虚感、不安、絶望を伴う、強力な生理的覚醒状態」と定義される (Hatfield, *et al.*, 1979)。PLS は 30 項目からなり、高い 1 因子性と内的一貫性が得られている。この尺度は、英語圏以外の国々でも用いられており (例えば、Kim & Hatfield, 2004)、恋愛感情の強度を検討する上で有用である。しかし、これがどの程度日本人に適用できるかは検討されていない。そこで河野ら (2008) は、この尺度を翻訳して日本人大学生に適用し、尺度特性を分析することによって、日本語版熱愛尺度 (以下日本語版 PLS) を構成した。

本報告では、日本語版 PLS の作成概要を紹介した後、これを用いて調査した熱愛度と他の感情 (尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪) ととの関係を分析した結果を述べる。

2. 日本語版熱愛尺度の構成と特徴

Hatfield, *et al.* (1979) による PLS の原典の翻訳に当たっては、まず、心理尺度作成経験のある本論文の第二著者が試訳した。その後、予備調査 (n=279) を行って、基本的に尺度として成立可能であることを確認した。さらに、本論文の第一著者の校閲を経て訳文を改訂し、日本語を母語とする英語学の専門家を交えて再度訳文を改訂した。最後にバックトランスレーションを行い、作成した英文について英語を母語とする英語教育の専門家がオリジナルの英文と比較して意味内容に問題がないことを確認し、これを以下の最終的な日本語版 PLS30 項目とした。

日本語版 PLS30 項目

* は、PLS で指定されている短縮版用の 15 項目。

- (1) ○○さんと親しくなってから、私の気持ちは、高ぶったり落ち込んだりを繰り返している。
- * (2) もし、○○さんが私から離れていったら、私は絶望するだろう。
- (3) ○○さんを見るだけで、私の体は興奮で震えることがある。
- (4) ○○さんの動作や、いろいろな角度からの姿をじっと見ていることが楽しい。
- * (5) 時々私は自分の思考が思い通りにならないことがある。○○さんのことばかり考えていて。
- * (6) ○○さんを幸せにするようなことを私がしている時、自分も幸せだと感じる。
- * (7) 他の誰かというよりも、私は○○さんと一緒にいたい。
- * (8) ○○さんが誰かを好きになってしまったことを想像すると、私は嫉妬してしまうだろう。
- (9) 私のように○○さんを愛することのできる人は、他にいないだろう。
- * (10) 私は、○○さんについて何もかもが知りたい。
- * (11) 私の肉体も、感情も、精神も、○○さんを求めている。
- (12) 私は、○○さんを永遠に愛するだろう。
- (13) ○○さんの目をじっと見つめていると、私は虜にされそう。
- * (14) ○○さんから愛されたいという私の気持ちにはきりが無い。
- * (15) 私にとって、○○さんは完璧な恋愛相手だ。
- (16) ○○さんは、私を最高に幸せな気持ちにさせられる人だ。
- * (17) ○○さんが私に触れると、私の体が反応するのを感じる。

- (18) 私は、○○さんにはやさしい気持ちになれる。
- * (19) ○○さんのことが、いつも私の頭から離れない気がする。
- (20) ○○さんと長い間離れていたら、私はすごくさびしいと感じるだろう。
- (21) ○○さんのことで頭がいっぱいで、時々仕事に集中できないことがある。
- * (22) ○○さんには、私の考え、心配ごと、希望など、私のことを知っていてほしい。
- * (23) ○○さんが私を気にしてくれるのがわかると、私はとても満足した気分になる。
- (24) 私は、○○さんが私を欲しているそぶりを懸命に探している。
- (25) もし○○さんが苦境に立っていたら、私は○○さんを助けるために自分の用事を中断するだろう。
- (26) ○○さんは、私を陽気であげうきした気分になせられる。
- (27) ○○さんがいると、私は触れたいし触れられたい。
- (28) ○○さんがいなければ、私の人生は暗くわびしいものになる。
- * (29) 私は、○○さんに強く惹かれている。
- * (30) ○○さんとの関係がうまくいかないと、私はひどく気分が落ち込む。

完成した日本語版 PLS30 項目を用いて、あらためてデータ収集を行った。調査対象者は、東海地方の 5 大学の学生計 397 名（男性 193 名、女性 204 名）、平均年齢は 19.6 歳（年齢範囲 18～26 歳、SD 1.15）であった。回答は、PLS と同じく、9 件法（9；強い肯定～1；強い否定）で求めた。回答者に記名は求めなかった。結果は以下の通りであった。

日本語版 PLS30 項目にたいして主成分分析を行ったところ、固有値の減衰状況から強い 1 因子性が示された（寄与率 51%）。尺度の α 係数は

.97であり、高い一貫性を示した。また、当該項目を除いた合計得点にたいする各項目の相関係数は.48～.81であった。G-P分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。 α 係数が当該項目除外前より増大する項目が1項目のみ見られた(項目1)が、除外前後の差は.0002ときわめて小さかった。これらの結果から、この30項目が日本語版PLSとして妥当であると判断された。また、各項目の評定値の合計を日本語版PLS得点とし、この得点を諸分析に用いた。上記の調査における日本語版PLS得点の平均は、女性が159.6、男性が152.2であった。女性は男性よりもやや高かったが、先行研究同様、男女の有意差は認められなかった($t=1.50$, $df=395$, $p=.134$)。

なお、短縮版で用いられる15項目について分析した場合でも、 α 係数は十分高かったため($\alpha=.94$)、次に報告する調査では、短縮版を使用した。

3. 熱愛度と他の感情との関係

3-1. 恋愛対象者への熱愛度、肯定的感情、および否定的感情

熱愛度と、その対象となる人物(恋愛対象者)にたいする他の感情とはどのような関係があるのだろうか。恋愛対象者であれば、当然ながら、肯定的な感情は強く、否定的な感情は弱いと考えられる。しかし、家族にたいする感情や接触態度を調べた伊藤ら(2009)や羽成ら(2010b)では、愛情の対象である家族であっても、一定程度の嫌悪感や接触を回避しようとする傾向が現れることが示されている。彼らはこのような傾向が現れる背景の一つには、インセストを回避する機能という性的な要因があることを指摘している。

恋愛対象者は、性的対象または性的対象となる可能性のある人物であるから、配偶者選択について男性より慎重である女性においては、一定の熱愛感情を持ちつつも、男性よりも否定的感情を示

す傾向があるかもしれない。

以下では、恋愛対象者にたいする熱愛度と他の感情の関係を分析した結果を報告する。この調査では、繁殖適齢期である青年男女一本研究では、異性愛者に限定する一を対象として、恋愛対象者への熱愛感情、および、4つの感情(嫌悪、軽蔑、愛情、尊敬)を測定した。また、比較対象として同性および異性の友人にたいする4つの感情も測定した。

なお、ここでいう恋愛対象者とは、その人が恋愛感情を抱いたことのある相手のことであり、恋愛感情がありさえすれば、交際中である場合も、交際していない場合も含むものとした。

3-2. 調査方法

調査対象：調査参加者は、大学の学部学生の男女334名(126名の男性、208名の女性)であった。年齢の範囲は、18歳～28歳までで、平均年齢は20.29歳($SD=1.09$)であった。彼らは、心理学関連授業の受講生からリクルートされたボランティアであった。

質問紙：質問紙では、まず、各調査対象者に、恋愛対象者、および、同性と異性の友人を一人ずつ想起させた。そして、各々の人物にたいする感情を測定した。

本調査における恋愛対象者とは、交際中の異性が現在いる場合はその交際相手を、交際相手が現在いない場合は最も最近まで愛していた人を、これまで異性を愛したことがない場合は、恋愛に近いくらいに親しくなった人物のこととした。恋愛対象者にたいする熱愛の程度を、その人物にたいする恋愛感情が最も強かった時を想起させて、前述した日本語版PLSの短縮版を用いて測定した。本調査データによる α 係数は.93であり、尺度の信頼性は確認された。

加えて、恋愛対象と友人にたいする4種類の感情—「尊敬」「愛情」「軽蔑」「嫌悪感」—の程度を7段階(1. まったく感じない～7. 非常に感じ

る)で評定させた。

手続き：本論文執筆者それぞれが担当する授業の終了後、質問紙調査を実施した。実施前の説明は、本論文執筆者が行った。説明の中では、参加者には質問項目すべてについて、率直に回答することを求めたが、さらに、倫理的配慮を含めて、以下に言及した。まず、質問文を読んだ際や、回答している際に不快感を持つことがあるかもしれないと説明した。そのため、ボランティアとして参加する意思を表明した後であっても、回答はまったくの任意であって、はじめから回答を拒否すること、あるいは、回答をはじめた後で、いつでも回答を中止することが可能であること、さらに、無記名での回答のため、回答の中断や拒否によって不利益を被ることはないことを強調した。以上の説明内容は、質問紙の表紙にも記述されていた。参加者の匿名性を確保するために、事前の署名は求めなかった。本研究計画は、第二著者の所属する大学の倫理委員会にて審査を受け、許可を受けた。

3-3. 結果と考察

日本語版 PLS 得点の平均は、男性 79.66 (SD 22.33)、女性 82.23 (SD 25.15) であり、性差は有意ではなかった ($t=.89$, $df=296$, n.s.)。日本語版 PLS 得点の平均値よりも 2 標準偏差以上低い得点—33 点以下がこれに該当—の回答者は以降の分析から除外した。彼らは恋愛対象者への恋愛感情が著しく低いと見なしたためであった。その結果、288 名 (男 110 名、女性 178 名) の回答者が分析の対象となった。これは回答者の 86.2%であった。このときの日本語版 PLS 得点は、男性 80.59 (SD 21.42)、女性 85.00 (SD 21.93) であり、性差は有意ではなかった ($t=1.67$, $df=286$, n.s.)。

恋愛対象者、同性の友人、異性の友人について 4 種の感情評定値の性差を t 検定によって検討した。恋愛対象者については、「尊敬」のみ女性が男性に比べて強かったが、他の感情には有意な性差

が見られなかった (尊敬：女性 5.15、男性：4.76；愛情：女性 5.85、男性：5.94；軽蔑：女性 2.23、男性：2.03；嫌悪：女性 1.93、男性：1.90)。同性の友人については、尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪のすべてに性差が認められた。女性は、尊敬・愛情の肯定的感情が男性よりも強く、軽蔑・嫌悪の否定的感情が男性よりも弱かった (尊敬：女性 5.46、男性：4.96；愛情：女性 5.60、男性：3.70；軽蔑：女性 1.61、男性：1.99；嫌悪：女性 1.50、男性：1.85)。女性は男性よりも同性の友人にたいして親和的であると考えられる。異性の友人については、尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪のいずれにも性差が認められなかった (尊敬：女性 4.65、男性：4.49；愛情：女性 4.22、男性：4.08；軽蔑：女性 2.12、男性：2.07；嫌悪：女性 1.96、男性：1.97)。

次に、日本語版 PLS 得点と恋愛対象者にたいする各感情との相関を調べたところ、男女いずれも、尊敬と愛情において正の相関が有意に認められたが (尊敬：女性 $r=.331$ 、男性 $r=.280$ ；愛情：女性 $r=.553$ 、男性 $r=.620$)、軽蔑と嫌悪においては有意な相関は認められなかった。

上記のように、恋愛対象者にたいしては「尊敬」でのみ、女性回答者の方が男性回答者より高い値を示したが、他の感情では、回答者における大きな性差は見られなかった。回答者の性差は、むしろ、同性友人にたいしてより明確に出現していた。

さらに、女性回答者、男性回答者それぞれについて、各感情について評定対象者 (恋愛対象者・同性友人・異性友人) の要因の効果を分散分析によって検討した。評定対象者の要因の効果が有意もしくは有意傾向であった感情については、多重比較 (Tukey の HSD 検定による) によって大小関係を分析した。その結果、恋愛対象者にたいしては、女性回答者、男性回答者いずれも、予想される通り、「愛情」の評定値が、同性友人や異性友人より高くなっていた (男性： $p<.01$ 、女性： $p<.10$ ；HSD 検定による。以下同様)。しかし、女性回答者の恋愛対象者にたいする「尊敬」は、同性

友人よりも低く ($p < .05$)、「軽蔑」と「嫌悪」の否定的感情は、同性友人よりもやや高くなっている (軽蔑: $p < .01$; 嫌悪: $p < .01$)。一方、男性回答者ではこのような差異は有意ではなかった。したがって、同性友人を基準に比較した場合、相対的に女性回答者の方が男性回答者よりも、恋愛対象者にたいして厳しい評価を行っていると言える。日本語版 PLS 得点には有意な性差が見られなかったことから、このような厳しい評価の原因が、女性の熱愛度が男性よりも弱かったことにあるとは考えられない。また、女性が恋愛対象者を人格的に低く評価していたからとも考えられない。女性回答者における恋愛対象者への「尊敬」の評定値は、男性よりも高いのである。

相関分析の結果が示すように、熱愛度と「愛情」には男女回答者いずれも高い正の相関が見られた。しかし、「尊敬」については、有意な正相関が見いだされたとは言え、その程度は高くはなかった。また、「軽蔑」と「嫌悪」には、高い熱愛度から予想される負の相関は見られなかった。これらの結果は、特に「軽蔑」と「嫌悪」については床効果によって相関が生じにくくなったことも一因と考えられるが、熱愛度の高さが、人格的な評価には必ずしも直結しないことを示している。さらに、女性回答者においては、恋愛対象者にたいする「尊敬」が相対的に男性回答者より低く、逆に「軽蔑」と「嫌悪」は相対的に男性回答者より高かったことから、この“熱愛度と人格評価の独立性”は、女性の方で明瞭に生じていると考えられる。

4. まとめ

本論文では、妥当性が確認された日本語版 PLS を用いて、熱愛度、および、肯定的感情、否定的感情との関係を分析した調査結果を報告した。恋愛対象者にたいして一定程度の熱愛感情を有することと、人格的な側面での評価との間に直接的な

関連が見いだされなかったことは、熱愛感情の興味深い特徴の一つを表している。

また、同性友人を基準に比較した場合の、恋愛対象者にたいする否定的感情の現れ方 (相対的に低い尊敬、相対的に高い軽蔑と嫌悪) が、女性回答者で明瞭であった点も見逃せない。

本調査では、尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪の4感情を取り上げたが、熱愛感情のより深い分析のためには、これら以外の感情や恋愛対象者への態度を測定することも有効であろう。熱愛感情およびこれを含めた恋愛心理の科学的な解明に、日本語版 PLS が有効に活用できるものと考えたい。

引用文献

- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2010b) 父母やきょうだいにたいする嫌悪感にインセスト回避の表れか? 椋山女学園大学文化情報学部紀要第9巻第2号、45-54。
- Hatfield, E., Walster, G. W., and Traupmann, J. (1979). Equity and premarital sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 82-92. Reprinted in M. Cook & G. Wilson (Eds.), (1979). *Love and attraction: An international conference*. (pp. 323-334). Oxford: Pergamon Press.
- Hatfield, E. and Sprecher, S. (1986). Measuring passionate love in intimate relations. *Journal of Adolescence*, 9, 383-410.
- 伊藤君男・河野和明・羽成隆司 (2009) 父母およびきょうだいにたいする接触忌避。第2回日本人間行動進化学会プログラム抄録集、p. 14。
- 河野和明・羽成隆司・津田早苗・Beverley E. Lafaye (2008) 日本語版熱愛尺度 (Passionate Love Scale) の作成。日本心理学会第72回大会発表論文集、p. 997。
- Kim, J. and Hatfield, E. (2004). Love types and subjective well being. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 32, 173-182.

はなり・たかし / 文化情報学部教授

E-mail: hanari@sugiyama-u.ac.jp

かわの・かずあき / 東海学園大学人文学部教授

E-mail: kawano@tokaigakuen-u.ac.jp